新刊紹介

絵所秀紀・穂坂光彦・野上裕生編著『シリーズ国際開発 第一巻 貧困と開発』

野上裕生

日本評論社、2004年

本書は国際開発学会設立一五周年記念の一環として企画された全五巻のシリーズの第一巻である。

「貧困削減」は国際開発と援助の世界では最重要課題と位置付けられ、国際開発学会だけでなく、さまざまな途上国関係の学会でも取り上げられている。しかし「貧困」の見方が多様化し、その解決策も広がっていく中で、論点の集約を行う必要も感じられる。このような期待にこたえようとしたのが本書である。本書の構成は以下のようになっている。

序章「貧困と開発—主要論点の整理」（絵所秀紀）は最近の開発援助と貧困削減の動向を要約し、本書の各章の内容の紹介と位置付けを行っている。

最初の二章はマクロ経済学と貧困削減を見たものである。第一章「経済成長と貧困・雇用—Pro-Poor Growth論の系譜」（山形辰史）は、「Pro-Poor Growth」という概念をめぐる最近の議論を紹介し、貧困層を対象にした直接支援政策だけでなく、低賃金の国での労働集約的な製造業品の輸出を通じた貧困層の賃金と雇用機会の改善の可能性について分析している。第二章「開発援助と貧困削減の経済学」（澤田康幸）は、開発援助の経済成長への効果を数量的に分析し、借款の経済成長への寄与度が相対的に大きいこと、贈与の（旧植民地国への優先配分など）戦略的配分が行われていることがその有効性を損なっている可能性を指摘している。

次の二章は農村と都市の貧困に固有の問題を扱っている。第三章「農村の貧困と開発の課題」（藤田幸一）は、市場メカニズムの活用に注目して農村・農業の発展と貧困削減のあり方を紹介している。第四章「都市貧困と居住貧困」（穂坂光彦）は都市の貧困の特徴を「居住貧困」という視点から明らかにし、これまでのスラム住宅地に対する技術的対応策のあり方を分析し、最後に一九九〇年代以降の新しい動きを紹介している。

次の四つの章は個別テーマに注目したものである。第五章「貧困と教育」（岡田亜弥）は貧困（あるいは貧困削減）と教育の相互依存関係について先行研究を素材にして解説し、貧困層の教育機会の拡大（たとえばノンフォーマル教育）について考察している。

第六章「ジェンダーと貧困」（上山美香・黒崎卓）は、近年のミクロデータの充実による最先端の研究成果を踏まえて、所得や健康などの側面に関して、ジェンダーと貧困との連関を明らかにしている。本章は家計内のバーゲニングや資源配分、あるいは貧困層を対象にしたターゲッティングの問題を詳しく論じている。

第七章「マイクロ・ファイナンスの金融メカニズム」（三重野文晴）は、マイクロ・ファイナンスの金融機関としての活動の特徴を明らかにし、金融機関として自立していくメカニズムや、貧困削減に対する意義と限界にも言及している。

第八章「ソーシャル・キャピタル」（坂田正三）は、近年開発援助で注目されている「ソーシャル・キャピタル」概念の整理を行い、これらの概念が国際機関や先進国の援助機関でどのように活用されているのかを包括的に展望している。

最後の二章は地域の経済発展の経験を、貧困削減との関連で展望したものである。第九章「アフリカの貧困」（平野克己）は、「アフリカ的貧困」の様々な側面と「成長しない経済」としてのアフリカの特徴を考察し、ミレニアム開発目標達成のためにアフリカ農業発展の重要性を指摘している。

第一〇章「『貧困と開発』からみた日本の経験」（野上裕生）は、日本の経済発展がどの程度まで貧困削減に有効であったのかを雇用機会（農業や製造業など）、家計や中小企業を軸に展望し、それらの背景にある「社会的能力」の重要性を論じている。また本章では日本の貧困層向け公的政策の意義と問題点も紹介している。

本書は開発経済学を中心にしながらも、様々な学問分野の成果にも注目し、開発途上国の貧困削減を考えるのに最低限必要な知識を包括的に解説している。本書の編集の過程では、最先端の研究成果を初心者にも理解できるように工夫した。また本書の各章では、貧困削減と関連の深い政策課題に関する重要な論点が整理されており、学生・大学院生や一般社会人、開発援助の実務家、さらには研究者にも有益な書物になるように配慮した。筆者は本書の編集・執筆を通じて、「貧困削減」という難しい重要課題について改めて理解を深めることができた。本書が開発問題に関心を持つ広範な人々に読まれることを希望したい。

（のがみ　ひろき／アジア経済研究所開発研修室）